Title:「Back home」

中村 創太
1979年生まれ、三十路です。帰って来てから10キロ弱太りました・・。

最近のエントリー
- 至極、個人的な都市風景論 ~2~ (2009.11.21)
- 至極、個人的な都市風景論 ~1~ (2009.11.14)
- フォトエッセイ始めました。 (2009.11.14)

アーカイブ
- 2009年12月
- 2009年11月
- 2008年09月
- 2008年08月
- 2008年07月
- 2008年06月
- 2008年05月
- 2008年04月
- 2008年03月

投稿カレンダー

カテゴリー一覧

ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

RSS 2.0

Back Home > 2009年11月 アーカイブ

09.11.21

至極、個人的な都市風景論　~2~

Tweet　　Check

東京でも有数の大きさの池を持つ公園には、天気の良いせいか大勢の人がごった返している。遊具で遊ぶ子供達は勿論、その周りの母親達も幾つかのグループを作ってたむろしていて、池の周りに据えられたベンチもほぼ満席だったが、スワンボートだけが不自然なほど物悲しく、波止場に繋がれたまま揺れていた。

昼食後の一服がしたくて園内へ寄り道をしてみたものの、灰皿はおろか人目を気にせず煙草を吸えるような場所すら入り口付近には見あたらない。確かに公園の周辺は背の低い住宅に囲まれていて、背の高いビルが樹木の隙間に図々しく飛び出している訳でもないから、日常の煩わしさを切り離してゆったり時間を過ごせるという意味では、都内では珍しいとても良い公園だと言える。ただし、そこに灰皿は無いのだ。第一、ここまで来た目的を考えるとその場に和む事自体に煩わしさを感じてしまったから、誰も寄り付かない日陰の砂場の淵に腰掛けると、目の前を駆け抜けた少女に対して何となく後ろめたさを感じながらも、僕は携帯灰皿を取り出してこそこそと煙草を吸い始めた。

三歳位の子供達が小さな滑り台の階段の上で、行儀良く一列に並んでいる。先頭で滑り終えた女の子が斜面の終わる水平の部分に座り込んでいると、後ろに並んでいた男の子がゆっくりと降りてきて女の子の背中に張り付いた。それが3人分も繰り返されると、滑り台には愛らしい串団子が出来上がった。それは自宅の近所の児童公園に滑り台があってその公園で友人と遊んだ経験を持つ者ならば、誰もが思いつき、それを実行する遊びの典型だ。遊び慣れた道具でもちょっとした偶然の発見で別の面白さを見出せる事、複数人でなければその遊びが出来ない事、そして最初に遊び始めた者が滑り台を滑り切る事が出来、順番が後になるほど滑る距離が短くなってしまうという、単純だけれどなかなか意義のある遊びではある。

けれど、彼らは近いうちにその遊びから卒業するだろう。その証拠に子供達の中にはその行動にはしゃいでいる様子の者は居らず、彼らはむしろそれが滑り台で遊ぶ場合の習慣だと言わんばかりに、淡々と無表情のままその作業をこなしている。

『タコ公園』は僕の家とは違う区画にあって、そこまでは大人の足でも10分弱は掛かるから、当時3、4歳だった僕が一人で行けるような所ではない。それでも姉の後ろをくっ付いて女の子達の遊びに混ぜてもらう事しか出来なかった僕には、タコ公園の近所に住んでいた女の子が、唯一、同い歳で自分自身の友達と言える存在で、そのせいでその公園は僕にとっては割合と馴染み深い場所だった。それにその子の家に行く用事がなくても、そもそもタコ公園自体がその地域で一番大きな児童公園だったから、僕は母親の自転車の後部座席に乗せられて、最低でも週に一度くらいはそこへ遊びに行っていたと思う。

タコ公園をタコ公園たらしめているものは、勿論『蛸』である。タコの表皮はピンクのペンキ一色に塗られ、コンクリート製であるために質感は固くざらついている。2メートル以上体長を持つが、足はせいぜい5、6本しか無くて、背中と思われる部分には足が無い変わりに、大きな穴の空いたタコの頭部に、子供達が侵入する為の鉄の杭が何本も打ち付けられている。それを伝って空洞になったタコの頭へと辿り着くと、子供達は自分のはしゃいだ声が、タコの頭内部に反響するのを楽しむ。そうしていると段々後ろが詰まり始めるから、彼らは自分のお気に入りのタコの足をつたって、下に広がる砂場へと滑り降りる。

それがタコの滑り台の最も基本的な遊び方だ。けれど、過半数の子供達はその方法を推奨しない。なぜなら、タコの滑り台はその形状の為に一つの大きな欠点を持っていた。それは滑り終えた後で一回ずつ、タコの背中に回って背丈の二倍近くあるハシゴを上るよりも、滑り降りた所から手すりにつかまって、斜角の低い滑り台をよじ上った方が圧倒的に早いという事で、その滑り台に慣れれば慣れる程、子供達は煩わしい作業の短縮と、そこを駆け上る自分の勇姿を他の子供に見せつけようと懸命になり、挙げ句は滑る事よりもよじ上る事に夢中になる子供がいる始末だった。そうなると、それまで真面目に順番を守っていた子供にとっても、後ろからハシゴを上る事自体が馬鹿馬鹿しく思えてくるから、ついに彼はその正義に背いて、悪の道へと迷い込んでしまうのだった。

『事件』が起きたのは僕が彼女に勇姿を見せようとして『よじ上り』始めた頃だった。タコの足の中でも最難関は真ん中の足だ。それは最も急な斜角を持っていて、僕はしばらくするまで、目を瞑らないとその斜面から降りられなかった。当然それをよじ上る事は更なる難関で、その斜面には手すりも無いから、上るにはそれなりの腕力が必要で、僕は他の足からの登頂には成功したものの、どうしてもその一本だけが上れない。やがて僕はその姿を彼女に見られる事を恥ずかしがって、早々にその困難な作業を諦め、今度はその斜面を何度も連続で、そして早く滑り降りる事で自分の勇気を示すという、かなり独り合点な作業に没頭するようになった。しかし、そこで邪魔に入ったのがきつい天然パーマと細い目が印象的な、僕と背格好のそう変わらない男の子だ。彼は滑る順番を待っていた僕の手前でその斜面を滑り終えると、すぐに体を翻してそのまま急斜面をよじ登り始めた。僕はすぐに滑り落ちるはずだと高を括って見ていたが、彼は両手足を壁にしっかりと押しつけて、一歩一歩、順調に斜面を登ると再び僕の前まで戻って来た。

彼は満足げな顔をしてみせると、呆気にとられる僕の事など気にも留めずに、再び斜面から何の躊躇もせずにあっさりと滑り降り、そしてこちらを振り向くと、またもや斜面をよじ登り始めた。高揚した顔で斜面をよじ上ってくる彼に対して、僕は斜面の頂上に座り込んで動こうとせず、そのまま彼を手で押さえて滑り落とそうとする妨害を試みた。彼が一人で滑り台を占領している

そのまま彼を手で押さえて滑り落とそうとする効合を試みた。彼が一人で滑り台を占領している事を理由とするなら、その行動に正当性があると言い訳が立ったかもしれない。しかし、僕の動機となっていたのは、この滑り台を制覇する力を持った彼への嫉妬から生まれる憎しみでしかない。彼は僕の行動に驚いたが、直後、僕の左腕を今までに味わった事の無い衝撃的な痛みが襲う。彼は僕の腕に噛み付いた。表情を見れば彼が全力で噛み付いている事は明らかで、ちっとも剥がれない彼に、僕はそのまま腕の肉が噛み千切られるのではないかと恐れた。僕が大声を上げて泣き始めると、彼はにやりと白い歯を剥き出しにした後、斜面を滑り降りてそのまま何処かへ逃げてしまった。そうして僕は人生において初めての、完全なる敗北を喫した。

当然、タコ公園の事件は僕にとっては恥ずかしい話であったし、もしもあの時彼を突き落としていたらと考えると、背筋が寒くなるような話だ。だからこの話を知っているのは僕だけで、僕を噛んだ張本人も案の定、その事は全く覚えていなかった。

僕と彼はその数年後に小学校高学年向けの小さな英会話教室で再会を果たした。荒っぽい所は最初の印象通りだったが、明るく人懐っこい性格の少年に成長していた。僕にもその態度を持って接して来たが、僕はその前から、夢の中にまで、噛まれた衝撃と共に現れた男の子の顔の特徴を、彼にも発見していたから、僕は無邪気な彼に対して余計な緊張をする羽目になった。

ある日の授業の終わりの帰り道に、彼はそこから近いという彼の家へ、僕と僕の学校の友人を無理矢理に引っ張っていった。しかし、そこで僕はまた小さな敗北感を味わった。それは彼の家がタコ公園から50メートルも離れていない、金属が焼ける匂いを放つ小さな町工場で、工場の入り口から黒い油まみれの手をしたお母ちゃんが現れると、彼はお母ちゃんを誇らし気に僕等に紹介したからだった。

僕にとってのタコ公園と、彼にとってのタコ公園には、圧倒的な意味の違いがある。僕は噛まれる以前から彼が公園に居る事を知っていた。それは時折、彼が一人で道路へ飛び出して行くのを母親達が心配そうに見ていたのを覚えているからだ。彼は僕のように『連れて来てもらって』公園に来ていたのではない。家の事情もあって、仕方なく一人でその公園までやって来て、そして自分の遊びを追求する事に没頭していたのであって、それは僕が公園に行かない日も続けられていたのだろう。そんな彼の公園に対する記憶が、僕と同等である筈が無い。もしもあの頃の彼にとって、タコ公園が『唯一の場所』だったとしたら、彼がそれを自分だけの王国だと考えたとしてもそれは責められる事ではなかった。

真偽は彼に聞いてみなければ分からないし、彼にとってどれだけの意味があったのかは分からない。十数年前に彼の家族の工場があった一角は取り壊され、代わりに何十世帯分にも相当するような高層オフィスビルが出来上がった。僕は地元の中学校へは通わなかったから、その後彼とは出会っていない。

タコ公園は僕にとって『最初の社会』だった。公園に来る時には母親や仲のいい友達と一緒でも、お気に入りの遊具で遊んでいるうちに、つい夢中になって気が付くと友達は別の遊具で遊んでいて、自分は知らない子供達にまぎれて遊んでいた。いつもそういう具合だったから、滑り台の順番で喧嘩をしたり、シーソーで知らない奴と向かい合って妙な気分になったりする訳だけれど、今思えばそれは、自分から誰かと接触をした最初の体験で、その記憶の中にぼんやりと存在しているのは、達成感、自尊心、妬み、屈辱感、連帯感、痛み、そして罪悪感といったような様々な感情の『原型』であったように思う。そう言った感情は決して大人達から学んだものではなく、一人遊びや、子供達の社会の中でこそ育まれたものだった。その先の時間を生きる為の自分の尺度というものも、元を正せばその頃の感情に、時間をかけて形を持たせただけなのかもしれない。

幾ら事故や事件が後を絶たないとはいえ、全体を金網張りにされて夜には南京錠が掛けられた、ほとんど子供なんて居たためしのない公園や、母親が心配をしすぎて常に側から離れずに、子供を遊ばせている姿を見つけると、果たして今の公園は子供達の小さな社会が成り立つ場所となりえるのかと疑問に感じてしまう。タコ公園にしても今は区役所の仮施設が建っていて、敷地の半分を埋めている上に、辺りはすっかりビルに囲まれてしまったから、その影でちっとも日の当たらないベンチには会社員が煙草を吸う姿ばかりが目立つようになった。

勿論、今程ではなくても、僕が子供の頃から決して遊ぶ場所は足りていた訳ではない。小学生になってからは、狭くるしい、遊び飽きた遊具しか無い公園の中で時間を潰す事など退屈で仕方がなかったし、そんな所よりも友達の家へ行ってテレビゲームをしている方がずっと楽しいと感じていた。ただし、テレビモニターの前でじっと身動きせずに遊んだところで、誰かが作ったゲームの中には、個性の原型と言えるような記憶を見出す事は難しいし、多少は存在するとしても、それがその先にまで意味の広がりを持つ積極的な原体験だとは言い難たかった。

確かに子供達の社会は子供達のものでしかないし、それはその時代に合わせて柔軟に彼ら自身が作り出して行くものだから、心理学の専門家でも、ましてや人の親でもない僕が、気軽に口を挟むような事ではないかもしれない。けれど、子供達の社会など、所詮は大人達の都合で作られた枠組みの中のものでしかないのだから、そういう場所を提供する事も、奪う事も、やはり大人にしか出来ない事ではなかろうか。それを考えれば、若者に社会性が無いとか、きちんとした理由のない犯罪を起こすのが理解出来ないとか、そう言いたくなるようなニュースがテレビから流れてくる度にうんざりはするけれど、彼らに社会を理解する為の場所が存在したのかどうかを考

れてくる度にうんざりするけれど、彼らに社会を理解する術の場所が存在したのかどうかを考えずに、ただそれを責める事など出来やしないと思う。

<続く>

カテゴリ：

post by 中村 創太 | 日時: 2009.11.21 | パーマリンク | コメント (1) | トラックバック (0)

09.11.14

至極、個人的な都市風景論　~1~

Tweet　　Check

『殺風景』という言葉は、元来『物事の趣を殺ぐ無様なもの』という程度の意味でしかないらしい。

昼過ぎに都立図書館まで行って、適当に国語辞典やら語源辞典の殺風景の欄を見比べた結果、それは千二百年前の李商隠という人の漢詩の中で既に存在していて、用例としては、『華山の中に商品札を立て、祝宴の席にて凶事を談ずる事』だという。丁度今、若くはない図書館員の女性達が、暇つぶしに誰かの悪口としか思えないひそひそ話をするのを指し示す程度の言葉だそうだ。
とりあえず、確認したかった事については一応分かったので、僕の人生で五回目くらいの図書館訪問は、今まで通りに居心地の悪さを感じたまま三十分で終了した。

殺風景という言葉を生み出した先人が、場の雰囲気を打ち壊す無神経に対して、嫌悪感を抱いた事には共感出来る。ただ、その程度で『殺』の一字が使われた事は残念だ。
確かに、そんな『殺風景』に注意を向ける者がいなければ、やがてそれが甘受されてしまうかもしれない。だから大袈裟であっても、きつい形容を加えるべきだと言う判断を先人が下したのだとしたら、その時点でそれは素晴らしく賢明だったのだろう。ただし、それは良く切れる刀剣が存在したのかも怪しい時代に生まれるには、早すぎた言葉だという気がする。

人間の技術は進歩して、人為的に風景を『殺す』事が可能になり、さらには風景が大量の人間と共に無意味に『殺された』時代が過ぎ去った。そして、その焼け野原の上に築かれた、下手をすれば人間を『殺しかねない』現在の風景を見たら、おそらく例の先人ほど愕然とする者も居ないだろう。まあ、その言い方も大袈裟である事には変わりがないのかもしれないけれど。

今、『殺風景』という言葉から本来の意味を思い浮かべる人間がどれほど居るだろう。最早、『無様とすら言えない景色』に趣を見出す事は、その逆よりもずっと困難だ。

<続く>

カテゴリ：

post by 中村 創太 | 日時: 2009.11.14 | パーマリンク | コメント (1) | トラックバック (0)

フォトエッセイ始めました。

Tweet　　Check

大変長い間ご無沙汰しておりました。
フィールドワーク三期生、中村創太です。
現在は研究生という形で学校の方でお世話になっております。

この度、本ブログ上で『フォトエッセイ』を書いてみる事になりました。
「最後に謎のブログを書いて、何の音沙汰もなかったくせに、
この馬鹿はいきなり現れて何を言っていやがる？」
と思う方が大勢いらっしゃるのは当然でしょうが・・。
それに対しては何の申し開きも出来ず、
本当に申し訳なく思っております。

『フォトエッセイ』とは言ってみたものの、
本来の意味のフォトエッセイではなくて、
実際には文章に少し写真をくっ付けただけの『唯のエッセイ』です。
（最初の文章には写真を付けられませんでしたし・・。）
ちょっと格好を付けたかっただけです。

文章の内容は『東京を舞台とした都市論』を予定しております。
「全くフィールドワークと関係ねぇじゃん」
と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、
僕が東京についての文章を書く理由が、
海外フィールドワークでアジアの沢山の国を自分の目で見て来て、
故郷である東京という都市を、
今までよりも客観的に見られるようになったという事実に基づいていて、
その文章の中に、僕が中途半端に終わらせてしまったブログに対しての
僕なりの答えがある事を、
どうかご理解頂きたいと思います。

FWのブログに比べると、グダグダと長ったらしくて読み辛い、
何の面白みも無い駄文が続く事は請け合いですが、
もしもこれから書く物に少しでも興味を持って頂ける方がいらっしゃったならば、
大変嬉しく思います。

そう言う訳ですので、誠に手前勝手な話ではありますが、
今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

カテゴリ：

post by 中村 創太 | 日時: 2009.11.14 | パーマリンク | コメント (0) | トラックバック (0)

Copyright 2008 All rights reserved NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE　　powered by OLYMPUS